論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　門田岳久

門田氏の論文『宗教／ツーリズムの再帰的民族誌—現代日本の聖地巡礼と消費される宗教経験』は、現代社会において展開するツーリズム化された聖地巡礼の実態分析を通じ、「宗教的なるもの」の現代的位相を人類学的・民俗学的宗教研究の文脈に位置付け、宗教がツーリズムや市場経済との接合をみせている消費社会的文脈のもとに構成される、人々の宗教的経験や自己のあり方を、主に巡礼者＝ツーリストたちのナラティヴ分析等から解明したものであり、現代に生きる「普通の人々」にとって宗教とは何かを、改めて問い掛ける内容となっている。

調査と分析は、文化人類学的手法により中核的なフィールドワークの地を新潟県佐渡に設定するほか、四国巡礼ツアーに同行するなど、日本各地での主に 2004 年 4 月から 2009 年 5 月までの持続的調査で得られたデータに基づいている。ここでいう持続的とは、連続的な長期滞在ではなく、1 週間から 1 か月程度の滞在を数年に亘って繰り返す調査手法を意味するが、主題によってフィールドワークの方法も一様でなく、本論文の場合、宗教と消費社会における市場経済との連動を把捉する上でも、その手法は適切だったと判断される。

本論文は、以下のⅢ部 10 章から構成される。第 1 章では、従来の巡礼研究が、日常的規範を超越した真正性や聖性へと至る実践とみなされてきたため、これらの実践が近現代の社会変化の中で市場経済的価値を付与され、文化政策や観光産業にとって恰好の資源となっている世俗的な動向を、十分に焦点化してこなかった先行研究の不備を問うとともに、本論文で再帰性（reflexivity）を 3 つのレベルで使用する研究視角と研究枠組が提示される。第Ⅰ部「商品化される宗教」では（2～4 章）、聖地の世界遺産登録を例にとり、生活世界に基づいた宗教的価値規範が疎外される一方、観光的文脈で変容していく状況を描きつつ、宗教の本質的理解に至らないものとして捨象されてきた、市場経済と宗教との接合状況を捉える必要性がまず明示され、宗教の資源化の観点から，四国および佐渡での事例分析を中心に、近現代日本における巡礼のツーリズム化＝商品化を通史的に跡付けるとともに、こうした巡礼ツアーの現在的状況を、民族誌的に描き出す。ツアー現場では、綿密な計画・設計により商品性が徹底される一方、表向きには宗教性が演出され、巡礼者たちは読経や参詣といった集団的・身体的実践を通じて宗教的経験を獲得していくプロセスが明らかにされる。

第Ⅱ部「日常的宗教環境の再構築」（5・6章）では、佐渡における宗教観光業の形成と観光

業者の経営史な分析を行うとともに、擬似巡礼儀礼の消長を中心に、宗教環境が再編される過程を追い、生活世界における宗教的実践がどう変化し、また近年、演出的な再埋め込みがどのようになされるのか、主調査地の歴史的現在的な概容を示しつつ、分析的に記述される。第Ⅲ部「個の経験からまなざす」（7～9章）では、巡礼ツアーから戻ってきた人々が、想起的な経験の語りを介して、日常的社会関係の中でリアリティーを獲得する過程が詳論され、さらにはそれが自己の再定義の機会となるだけでなく、その自己物語として統合化された主体としての自己が、パフォーマティヴに作り出す自己省察的な行為として、新たな行事をも生み出すなど、地域社会にも持続的な影響を及ぼしている実態を、社会構成主義を基礎とするナラティヴ・アプローチ等を駆使して記述・分析する。その一方で、この地域における宗教的経験を解釈する新旧2つの装置の存在を浮上させ、日常的な不可解な出来事や超常現象を動物憑依に結びつけるかつての解釈装置が衰退し，代わって商業化された巡礼ツアーが部分的にではあるにせよ、動物憑依の持っていた経験解釈フォーマットを流用することで、人々を「宗教的なるもの」へ誘う装置となっている移行を明らかにする。さらに、これを反省的に再解釈し、巡礼ツアーを通した自己発見という先行研究でよく使われる解釈に疑念を呈し、一見消費社会に抗うオルタナティヴ・ツーリズムに近似した巡礼ツアーも、実は消費社会の論理に親和的であって、その過大評価は消費社会の権力の無批判な肯定に繋がることなどが指摘される。

以上の分析と考察からは、次の 2 つの結論が提示される（10 章）。第 1 は宗教とツーリズムの相互反照的な関係性についてである。巡礼ツアー参加者は、消費を通じて内面的経験を果たし、新たな自己像を描こうとしている点で、高度消費社会的な自己形成（再帰的自己）の一形態であると同時に、第 2 は彼らの自己意識と再帰性の問題として、いわゆる後期近代社会における自己の再帰的な形成は、永遠に到達し得ない「本当の自分」像に向かって無限に後退する隘路として議論される近年の先行研究に対し、その宗教的経験は巡礼ツアーでよくありがちな身体経験であったり、語られる物語もパターン化されていることから、必ずしもそこに無限後退が見い出せるわけではなく、自らの巡礼を通じて得た私的な経験として満足する傾向にある、その民衆的な作法は、再帰性を浅いレベルで留める「健全さ」の現れだと把捉した点である。

このような内容を持つ本論文の学術的貢献は、以下の 3 点にまとめられる。第 1 に、宗教を「普通の人々」の日常的な生の営みとして捉え直そうとした点である。宗教性と商品性とが不可分に絡み合っている現代人の宗教的経験や信心のあり方を、想起的語りを介して再帰的に自己の物語化していく構造を示しつつ、それらは事後的に想起され、他者に対して語ることでリアリティーを得るとして、対話的コミュニケーションの中で構成されることを明確にしたこと。

第 2 に、本論文が人類学的・民俗学的な手法に基づきつつも、マクロな文脈を個人レベルの語りや認識と接続させることに関して、ナラティヴ・アプローチなどを駆使し、民族誌の新たな記述スタイルを構想した点である。他者に向けて提示される経験的語りや自己物語が、宗教の次元か観光の次元かの一方に回収しえない重層的経験として意味付けられる、そのリアリティーがリアルに活写されており、方法的に第 1 の貢献を補完している。第 3 に、本論文ではマクロでグローバルな社会経済的環境から、中位の佐渡という生活圏における全体環境を経て、ミクロな個人レベルの認識へと接合させる、大胆な民族誌の構成を志向した点である。そこには疎遠となりつつあった人類学と民俗学の接合が企図され、「再帰的人類学としての民俗学」という提起は、公刊されるや大きな反響を呼ぶことは疑いえない。現代に生きる人々の生活世界を、多様な切り口から立体的に、かつダイナミックに解明している点で、現代文化を対象化した人類学的研究としても大きな貢献を果たしている。

審査委員会においては、本論文が多くのディシプリンの交錯する対象を扱っているため、各ディシプリンの議論が不十分なままに留まっている箇所が散見されること、また用語法や表現、記述の仕方にさらなる改善の余地があることなどが指摘された。しかしこれらは、本論文全体の価値を損なうほどの瑕疵ではないことが審査員全員によって確認された。したがって、本委員会は本論文が博士（学術）を授与するにふさわしいものと認定する。